

井内 昇先生のご退官にあたって

内 藤 博 夫

井内 昇先生は平成5年3月末日をもってお茶の水女子大学を定年退官される。先生は昭和50年10月に着任されて以来、17年半の長きにわたり、研究と教育を通じて地理学教室の発展に尽してこられた。昨年の式 正英先生に続いて井内先生ともお別れしなければならないと思うとき、制度上やむをえないこととはいえ寂しさを禁じえない。

井内先生のご専門は都市地理学であるが、農村までも視野に入れた広い観点から、都市および集落を研究してこられた。人間はどこかに住まなければならない。先生の研究の出発点は、この居住という人間にとって基本的な生存条件にかかわる問題の解明におかれていた。先生にあっては都市および集落は人間の居住の場ないし生活の場としてとらえられ、意義づけられてきたのである。このような立場から、都市における人口の分布と移動、ニュータウンの建設、土地利用計画などについて、自然環境の影響や時代的背景の解明とともに、住民の居住意識の変化にまで踏み込んだ研究をされ、その業績によって都市地理学の発展に貢献された。対象とした地域は国内に限らず、留学経験のあるイギリス、アメリカの両国にも及んだ。これらの業績には、国内外において現地調査を積み重ねてこられた先生の研鑽の成果が盛り込まれていることはいうまでもない。

お茶大着任前、先生は東京都庁、次いで国会図書館に勤務された。都庁では首都圏整備計画の企画立案に当たり、国会図書館では国会の立法案件にかかわる基礎調査に従事されたという。これらの機関に在職しながら、都市問題や環境問題の研究を続けることは、時間的制約などの点でご苦勞も多かったのではないと思う。しかし先生はこれらの困難を克服して研究を続けられた。都庁在職中に研修のためロンドン大学およびシカゴ大学に派遣されたのは、先生の調査・研究に対する熱意が評価されたためであろう。このような学問・研究に対する真摯な態度は、後に大学が先生をお迎えする理由の一つともなったのである。お茶大着任前の経験は、先生のその後の研究と教育の仕事に活かされている。例えば教育の分野では、先生の実社会での経験は、お茶大着任後の研究の成果とも結びつき、講義の中だけでなく卒業論文・修士論文に対する指導の面でも、学生たちの勉学意欲を高めてきた。このことは、全教官が出席する学部および大学院の合同ゼミにおける先生の発言などによっても、実感できることであった。

先生の教育熱心については定評がある。地理学科は学部1年生から大学院生まで含めると100名以上の学生を抱えており、全学生の氏名をその姿とともに正確に覚えることはかなり難しい仕事である。しかし先生はほぼ間違いなくこの課題をやりとげておられた。先生は英国紳士を思わせる風格をお持ちであるが、他方では誰とでも気さくに話し合われる庶民性もそなえておられる。こうした先生の人柄と豊かな学識を慕って、これまでも多くの学生が先生に指導を仰いできた。

先生は学内行政の分野でもその手腕を発揮され、一般教育委員長、附属小学校長などの要職を歴任してこられた。一般教育委員長をつとめておられたときは、一般教育の充実に努力されるとともに、文科系学生のための一般教育科目「情報学」の開設に貢献された。「小学生は可愛い」とは、先生が小学校長在任中に時折漏らしていた言葉である。この言葉がよく表しているように、先生は熱心に小学校の運営と教育の充実に取り組まれた。先生は教室主任として、またお茶の水地理学会の総務としても活躍された。教室の支柱であり、助言者でもあった先生とお別れするに当たって、退官後もますますお元気で活躍されることをお祈りするとともに、これまでと同様、私たち後輩を指導して下さいをお願いする次第である。